

学位論文審査の要旨

学位申請者	KAKIN OKSANA ジェンダー学際研究専攻2018年度生	論文題目	「未熟さ」を愛でる～アイドルのファン文化研究を起点とする 日本文化論の再考～
審査委員	主 査:	棚橋 訓 教授	インターネット 公表
	副 査:	斎藤 悦子 教授	
	副 査:	申 琪榮 教授	
	審査委員:	大橋 史恵 准教授	
	審査委員:	倉光 ミナ子 准教授	
学位名称	博士 (社会科学)		
(英語名)	(Ph. D. in Sociology and Gender Studies)		
		学位論文の全文公表の可否 :	否
		「否」の場合の理由	
		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む	
		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある	
		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている	
		<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている	
		<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている	
		※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について	

学位論文審査・内容の要旨

本論文は、アイドルの存在をめぐって構築される現代日本社会のファン文化の特性を実証的に解明する作業を通じて、日本文化の特性を論じるための新たな枠組みを提唱することを目的に据えている。1980年代から現在に至るまで、アイドルの在り方そのものも多様化・複数化しながら、アイドルの存在を核とするコンテンツ産業とその市場は日本社会において衰えることなく成長を続け、アイドル産業は国境を越えて世界化しながら規模を拡大し続けている。そして、そうしたアイドル産業の肥大化の過程は、プロダクツとしてのアイドルの存在はどのように享受されるべきであり、アイドルとそれを消費するものとの間の関係性はどのように構築・維持されるべきなのかという、「正しいファンの在り方」や「ファンとしての正しい行動様式」をめぐる意識の醸成も喚起し、アイドルのみならずファンの正統性をめぐる議論が巷間に流布していく過程でもあった。「正しいファン」とはアイドル・コンテンツ産業の単なる「消費者」であってはならず、ファンはアイドルを「推して」「育てる」ことに邁進し、ファンはアイドルの「成長」の過程を分かち合い、その先にある「夢」の実現を共に寿ぐべきなのだというエトス。「このようなエトスは広く共有されているはずだ」という幻想。そして、「このようなエトスが広く共有されるべきだ」という信念。本論文では、こうしたエトス・幻想・信念が、「正しいファン」と「正しいファンによって支えられた正しいアイドル」の在り方を規定してファン文化の核を成してきたと仮定したうえで、ベネディクト・アンダーソンがナショナリズムの起源と普及の過程を論じた際に提唱した「想像の政治共同体」論を手掛かりとしながら、現代日本のアイドルのファン文化の実相を丹念に析出していく。具体的には、ジャニーズ事務所所属男性アイドルのファン(女性13名、男性3名の計16名)、AKBグループおよび「坂道」グループの女性アイドルのファン(女性14名、男性5名の計19名)に対して実施した半構造化インタビューと自由応答法によるin-depthインタビューで得た情報を、GTAの手法に従って処理し、その結果に基づいて分析と議論を進めた。分析の結果、ファンそれぞれにおいてアイドルを対象化する作法には多様性があり、実のところ、一様ではないことが確認された。しかしながら、同時に、ファン文化のエトスの中核にはアイドルの「未熟さ」の価値づけの過程が支配的な言説として存在し、「アイドルの未熟さを愛でること」を通じてアイドルとファンの間の関係性の定位とファンの行動実践の相互の意味づけや評価が成されていることが見出された。そして、「未熟さの愛で方」には「恋人視線」や「憧れ視線」と共に「親視線」が特徴的であり、特に男性アイドルの女性ファンにおいて顕著な「親視線」には、「あたたかく見守る」体裁を装いながらも、家長長制的な権力関係の再生産に接続するパラドクスを孕んでいることが指摘される。アイドル・ファンの実践のすべてが「親視線で未熟さを愛でること」に合致するわけではないのに、それがすべてを回収し得るかのような「大きな物語」の位置を与えられていることに、ファン文化のエトス・幻想・信念の核(ファンイズム)が見出される。また、「未熟さを愛でる」イデオロギーは、広く日本文化の特性を考察するための重要な鍵となることが示唆される。

従来、現代日本のアイドルのファン文化についてはステレオタイプに基づいた予見的な議論が頻発し、「オタク」とラベリングされて周縁化もされ、その実践を詳細に記録して論じた先行研究の蓄積に乏しい。本論文は35名に対するin-depth interviewに基づく詳細な分析、さらに多様な資料を駆使した総合的手法による優れた実証研究として高く評価され、本論文の意義は正に先行研究の欠落を埋める作業としての重要性にあるとともに、アンダーソンの政治理論を援用しながらファン文化を総合的に捉える枠組みを論じた独自性にある。ミクロな次元の実践とマクロな次元の社会規範・社会構造・社会制度との間の節合過程についての記述・分析が本論文ではやや手薄であることが指摘されるものの、それは本論文の価値を損なうものではない。

2021年12月15日と2022年2月7日に審査委員会を開催し、基本概念の精緻化、ジェンダー視点からの分析を強化する方策等々について議論がなされたが、その結果を受けて適切な修正が施された。2022年2月22日に公开发表会(online開催)と最終試験を実施したが、公开发表会及び最終試験での質疑応答の内容を含め、最終審査会では、委員全員が一致して本論文が学位取得に相応しい水準に達しているものと判定した。よって、本委員会は申請者に対してお茶の水女子大学博士(社会科学)、Ph. D. in Sociology and Gender Studiesの学位授与を適当と判断した。